

## 日本語の人名における表記の冗長性：関係形態論の観点から

著者	秋田 喜美
雑誌名	国立国語研究所論集
号	21
ページ	1-13
発行年	2021-07
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00003432">http://doi.org/10.15084/00003432</a>

# 日本語の人名における表記の冗長性

——関係形態論の観点から——

秋田喜美

名古屋大学／国立国語研究所 研究系 理論・対照研究領域 客員准教授

## 要旨

近年の日本人名には、漢字を冗長に用いるものが散見される。「水月 /mizuki/」は /zu/ の部分が、「咲希 /saki/」は /ki/ の部分が、「花奏 /kanade/」は /ka/ の部分が、それぞれ2つの漢字の読みの一部となっているように見える。本稿では、これらの非規範的な名前を関係形態論の観点から分析する。「水月」型の名前は、*composium* (*compose* + *symposium*) のような、構成要素どうしが音韻的に一部重なる混成語と同様に扱える。一方、「咲希」型と「花奏」型については、*(The) Beatles* (*beat* + *beetles*) のような包含型の混成語に似ているものの、構成要素の表記をともに残している点で異なる。この独自性は、漢字を用いた命名法の創造性の一端を示している\*。

**キーワード**：混成，漢字，表記，人名，関係形態論

## 1. はじめに

近年、「水月 /mizuki/」, 「咲希 /saki/」, 「花奏 /kanade/」のような日本人名が散見される。これらの名前は、漢字を冗長的に用いているという共通点を持つ。「水月」は /zu/ が、「咲希」は /ki/ が、「花奏」は /ka/ が、それぞれ2つの漢字の読みの一部になっているように見える。本稿では、この非規範的な漢字と音韻の関係に注目する。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では、日本人名における冗長な漢字使用の例を整理する。第3節では、分析の枠組みとして、レキシコンにおける項目間関係を追究する「関係形態論」(Relational Morphology; Jackendoff and Audring 2020) を導入し、特に混成 (blending) の扱いを紹介する。第4節では、日本人名における漢字と読みの対応関係が同理論で無理なく扱えることを示すとともに、それが混成と共通の仕組みを利用しつつも独自性を有することを指摘する。第5節は結語である。

## 2. 日本人名における冗長な漢字表記

日本人名における漢字の冗長性を扱った研究は、管見の限り見当たらない。そのため、基礎的

---

\* 本稿は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」(プロジェクトリーダー：窪蘭晴夫) の研究成果である。有益なコメントをいただいた松本曜氏および山口昌也氏に謝意を表したい。なお、本研究は、2020年の名古屋大学の科目「共時英語学演習II」における議論から生まれた。参加してくれた受講生たちに感謝したい。本稿に残る問題はすべて筆者の責任である。

な記述から始めることにする<sup>1</sup>。具体的には、漢字が冗長な名前が近年増加しつつあることを指摘し、その分類を試みる。

冗長な漢字使用を含む「水月 /mizuki/」, 「咲希 /saki/」, 「花奏 /kanade/」のような名前は、近年の流行であるように感じられる。まず、明治安田生命の「名前ランキング」における1912年から2019年までの新生児の名前表記トップ10に見られる冗長な漢字表記は、「歩夢 /ajumu/」(2010年にランクイン), 「蒼空 /sora/」(2010-2013年にランクイン), 「結衣 /jui/」(2001-2017年にランクイン)の3件のみであり、いずれも近年台頭した名前である<sup>2</sup>。(なお、もし「香織 /kaori/」(1973-1988年にランクイン)を「香 /ka/ + 織 /ori/」ではなく「香 /kaori/ + 織 /ori/」と分析できるとすれば、早期の人気な冗長例ということになる。第4.2節で関連する考察を行う。)

次に、近年に限られるものの、より多くの名前を含む『良運命名® - 名前ランキング』の「人気の名前：年間名前ランキング」(以下『良運命名』; 2012-2020; 2020年8月24日現在)を見てみる。『良運命名』は、子どもの名づけのための姓名判断サービスであり、100万人以上の利用者から収集した人気の名前を毎年男女100個ずつ公開している。漢字を冗長に使用した名前の数を年ごとに示すと図1のようになる。このデータにおける漢字2～3字からなる名前に占める冗長な名前の割合と年の相関は、男児名では有意傾向( $p = .633, p = .067$ ), 女児名では有意である( $p = .967, p < .001$ )。したがって、冗長な漢字使用は特に女児名において増加傾向にあるようである。

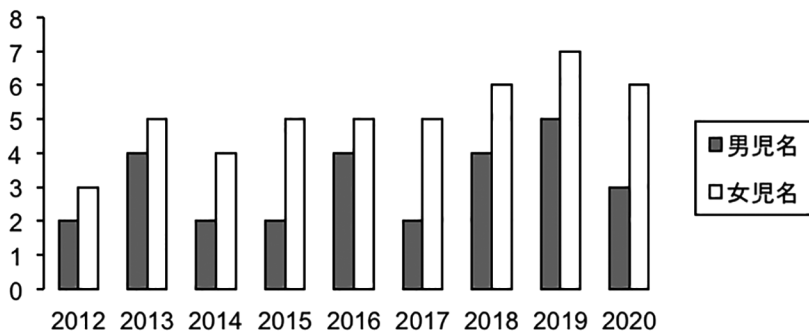


図1 各年の人気の名前トップ100における冗長な漢字名の種類数

冗長な漢字表記が生み出される理由としては、いくつかの可能性が考えられる。1つは画数である。名前の画数による姓名判断は、今も多くの親の関心事である。もう1つは字面や漢字の意味である。例えば、「蒼空 /sora/」に「蒼」という漢字が追加されている背景には、色彩を表すこの漢字が近年大いに流行していることがあると考えられる。『良運命名』における人気の新生

<sup>1</sup> 用いられる音、接辞、文字の通時的観察については川岸(2013)、張(2015)、Collazo(2016)などがある。また、いわゆる「キラキラネーム」を持つ音韻的特徴については北原(2017)の観察が存在する。

<sup>2</sup> 「蒼空」については、/aoi, aozora/などの読み方も存在する。また、/sora/と読む場合も、もととなる「蒼」の読みは/so/ではなく/so:/であり、他の冗長の例とは若干異なる。

児名トップ 100 (2012-2020) には、「蒼空」以外に「蒼」、「蒼生」、「蒼太」、「蒼大」、「蒼真」、「蒼介」、「蒼士」という男児名がランクインしている。あるいは、独創的な漢字使用により名前に個性を出したいという動機もありそうである。また、(特に苗字が「林」や「原」など漢字 1 文字の場合に) 漢字 1 文字の名前を避けようという意図が働いているのかもしれない(松本曜氏、私信)<sup>3</sup>。

冗長な漢字使用を含む日本人名は 3 種類に分けられる。以下では、実生活およびインターネット検索により存在を確認した名前を分類していく。具体的なデータ収集の手順は次の通りである。まず、筆者が実際に目にしたことのある冗長な漢字名を思いつく限りリストした。次に、明治安田生命および『良運命名』の名前ランキングから「唯 /jui/」のように漢字 1 文字からなる名前を拾い、それに漢字を冗長的に付加した「唯衣 /jui/」のような名前が実在するかをインターネット検索で確認した。さらに、これらの名前に似た名前をインターネットで検索していき、可能な限りデータを拡充した。以下、☆を付した名前は、『良運命名』のトップ 100 にランクインしているものである。

冗長な漢字使用の 1 つ目は「水月」型である。このタイプにおいては、1 つ目の漢字(連続)と 2 つ目の漢字が一部のみ音韻的に重なる。(1) はいずれも女性の名前である。

- (1) ☆ 柚月 /juzuki/ (柚 /juzu/ + 月 /zuki/)  
 水月 /mizuki/ (水 /mizu/ + 月 /zuki/)  
 光月 /mitsuki/ (光 /mitsu/ + 月 /tsuki/)  
 睦月 /mutsuki/ (睦 /mutsu/ + 月 /tsuki/)  
 汐織 /siori/ (汐 /sio/ + 織 /ori/)  
 美祈 /minori/ (美 /mi/ + 祈 /inori/)  
 景糸 /keito/ (景 /kei/ + 糸 /ito/)  
 有海 /ju:mi/ (有 /ju:/ + 海 /umi/)  
 明日澄 /asumi/ (明日 /asu/ + 澄 /sumi/)

2 つ目は「咲希」型である。これは、1 つ目の漢字のみで全体の読みが完成するにもかかわらず、2 つ目の漢字が冗長的に追加されている (2) のような名前である<sup>4</sup>。このうち少なくとも (2a-ii, 2b-ii) については、「歩 /aju/ + 夢 /mu/」や「咲 /sa/ + 希 /ki/」のように冗長を含まない分析も可能である。この問題については第 4.2 節で考える。

<sup>3</sup> AMUSE, CRAYON, NEWS エンターテインメント, Signboard40, スマイルモンキーの 5 サイトから得た子役タレント男女計 640 名 (0-15 歳) の名前によると、漢字 1 字の姓に対して漢字 1 字の名が付けられているのは 1 名 (3.23%) のみで、漢字 1 字の姓を持つ残り 30 名 (96.77%) の名は漢字 2 字以上であった。一方、漢字 2 字以上の姓に対しては、漢字 1 字の名は 104 名 (17.08%), 漢字 2 字以上の名は 505 名 (82.92%) であった。フィッシャーの正確確率検定の結果、姓名とも漢字 1 字である名前が好まれないことが示された ( $p < .05$ )。

<sup>4</sup> 名前以外の類例としては「羽根 /hane/」が挙げられるかもしれない。「羽音 /haoto/」や「羽衣 /hagoromo/」のような語が示すように、「羽」の本来の読みは /ha/ である。ところが、「羽 /hane/」という表記の存在が原因となり、少なくとも共時的には「咲希」と同様の冗長性を感じさせる可能性がある。

## (2) a. 男性名：

- i. ☆ 湊斗 /minato/ (湊 /minato/ + 斗 /to/)
- ☆ 湊人 /minato/ (湊 /minato/ + 人 /to/)
- 匠海 /takumi/ (匠 /takumi/ + 海 /(u)mi/)
- 真人 /makoto/ (真 /makoto/ + 人 /to/)
- 隆史 /takasi/ (隆 /takasi/ + 史 /si/)
- 剛志 /tsujosi/ (剛 /tsujosi/ + 志 /si/)
- 仁志 /hitosi/ (仁 /hitosi/ + 志 /si/)
- ii. ☆ 歩夢 /ajumu/ (歩 /ajumu/ + 夢 /mu/)
- ☆ 新太 /arata/ (新 /arata/ + 太 /ta/)
- 久志 /hisasi/ (久 /hisasi/ + 志 /si/)

## b. 女性名：

- i. ☆ 葵衣 /aoi/ (葵 /aoi/ + 衣 /i/)
- ☆ 花奈 /hana/ (花 /hana/ + 奈 /na/)
- 唯衣 /jui/ (唯 /jui/ + 衣 /i/)
- 南海 /minami/ (南 /minami/ + 海 /mi/)
- 岬咲 /misaki/ (岬 /misaki/ + 咲 /saki/)
- 愛衣 /ai/ (愛 /ai/ + 衣 /i/)
- 都子 /mijako/ (都 /mijako/ + 子 /ko/)
- 泉水 /izumi/ (泉 /izumi/ + 水 /mi/)
- 七菜 /nana/ (七 /nana/ + 菜 /na/)
- 環希 /tamaki/ (環 /tamaki/ + 希 /ki/)
- 栞里 /siori/ (栞 /siori/ + 里 /ri/)
- 渚沙 /nagisa/ (渚 /nagisa/ + 沙 /sa/)
- 雪季 /juki/ (雪 /juki/ + 季 /ki/)
- 茜音 /akane/ (茜 /akane/ + 音 /ne/)
- 瞳美 /hitomi/ (瞳 /hitomi/ + 美 /mi/)
- 尚緒 /nao/ (尚 /nao/ + 緒 /o/)
- ii. ☆ 咲希 /saki/ (咲 /saki/ + 希 /ki/)
- ☆ 紬希 /tsumugi/ (紬 /tsumugi/ + 希 /gi/)
- ☆ 結衣 /jui/ (結 /jui/ + 衣 /i/)
- ☆ 希実 /nozomi/ (希 /nozomi/ + 実 /mi/)
- ☆ 光莉 /hikari/ (光 /hikari/ + 莉 /ri/)
- ☆ 遥香 /haruka/ (遥 /haruka/ + 香 /ka/)
- ☆ 明莉 /akari/ (明 /akari/ + 莉 /ri/)
- 萌絵 /moe/ (萌 /moe/ + 絵 /e/)

恵美 /megumi/ (恵 /megumi/ + 美 /mi/)  
 好美 /konomi/ (好 /konomi/ + 美 /mi/)  
 仄香 /honoka/ (仄 /honoka/ + 香 /ka/)  
 静香 /sizuka/ (静 /sizuka/ + 香 /ka/)

3つ目は「花奏」型である。このタイプは、「咲希」型とは反対に、2つ目の漢字が全体の読みを与え、1つ目の漢字が冗長的に付加されている。(3)の例は、「蒼空」以外はいずれも女性名である。

- (3) ☆蒼空 /sora/ (蒼 /so:/ + 空 /sora/)  
 花奏 /kanade/ (花 /ka/ + 奏 /kanade/)  
 史栞 /siori/ (史 /si/ + 栞 /siori/)  
 衣泉 /izumi/ (衣 /i/ + 泉 /izumi/)

表1に、『良運命名』のトップ100における各タイプの新生児名の種類数を示す。冗長的な漢字名の独創性を踏まえるなら、それらはランク外にこそ豊富であることが期待される。それでも、特に「咲希」型については人気の名前にもいくらかの例が見られ、その生産性が窺われる。

表1 人気の名前トップ100における冗長な漢字名の型ごとの種類数

	「水月」型	「咲希」型	「花奏」型	計
男児名	0	8	1	9
女児名	1	9	0	10
計	1	17	1	19

以下では、日本人名における表記上の冗長性の統一的扱いを考える。これにより、従来観察されてきた非規範的語形成（特に混成）と似て非なる現象が、漢字による命名体系に成立していることを示す。

### 3. 関係形態論における混成の扱い

本稿は、分析の枠組みとして「関係形態論」(Jackendoff and Audring 2020)を採用する。この枠組みは、発表されて間もないものの、「3部門並列構成」(tripartite parallel architecture; Jackendoff 2002)の言語観を形態論に応用したものであることから、すでにある程度の歴史を有しているともいえる。また、先に提唱された「構文形態論」(Construction Morphology; Booij 2010)とも共通点が多く、関連する事例研究も少なからず蓄積されている(Booij 2018)。

関係形態論とは、各語彙項目における音韻(phonology)、統語(morphosyntax)、意味(semantics)の3部門間の対応関係である「インタフェイス・リンク」(interface link)と、語彙項目間の関係である「関係リンク」(relational link)を追究することで、レキシコンの内部構造を忠実に再現し

ようとする試みである<sup>5</sup>。例えば、英語の *pig* という名詞と *piggish* という形容詞は、(4) のように表示される。

- (4) Semantics: a. PIG<sub>1</sub>    b. [LIKE (PIG<sub>1</sub>); SLOPPY, GREEDY]<sub>3</sub>  
 Morphosyntax: N<sub>1</sub>        [A N<sub>1</sub> aff<sub>2</sub>]<sub>3</sub>  
 Phonology:    /pɪg/<sub>1</sub>        /pɪg<sub>1</sub> ɪf<sub>2</sub> /<sub>3</sub>                    (Jackendoff and Audring 2020: 13 を調整)

まず、*pig* と *piggish* におけるインタフェイス・リンクは、それぞれ 1 と 3 で示されている。一方、*piggish* の各部門内における 1 は、この語彙項目内のインタフェイス・リンクに加えて、*pig* との間の関係リンクを示している。

関係形態論では、さまざまな形態的・音韻的現象が扱われている。中でも混成語は、意味構造と音韻・統語構造の関係が非規範的な例として論じられており、本稿と強く関係する。混成においては、ある語の音韻構造の前半と別の語の音韻構造の後半が合成される（窪菌 2008, DiGirolamo 2012, Fradin 2015）。2つの音韻構造の間には、(5) に示すように、重なりが認められる場合と認められない場合とがある。例えば、(5b) の *composium*（作曲シンポジウム）においては、構成要素の *compose* と *symposium* の間に /mpovz/ という共通部分が存在する。(5c) の (*The Beatles*) に関しては、*beetles* が音韻的に *beat* を包含している。

- (5) a. 音韻的な重なりを含まない混成語：  
*spork* (*spoon* + *fork*)  
*brunch* (*breakfast* + *lunch*)  
*grue* (*green* + *blue*)  
 破く /jabuku/（破る /jaburu/ + 裂く /saku/）
- b. 音韻的な重なりを含む混成語 1（非包含型）：  
*composium* (*compose* + *symposium*)  
*Singlish* (*Singapore(an)* + *English*)  
*motel* (*motor* + *hotel*)  
 ピアニカ /pianika/（ピアノ /piano/ + ハーモニカ /ha:monika/）
- c. 音韻的な重なりを含む混成語 2（包含型）：  
 (*The Beatles*) (*beat* + *beetles*)  
*HIStory* (*his* + *history*)（マイケル＝ジャクソンのアルバム）<sup>6</sup>  
*Psyche* (*psych* + *cycle*)（音楽制作用プログラム）  
 韻シスト /iNsisuto/（韻 /iN/ + インシスト /iNsisuto/）（ヒップホップ・グループ）

関係形態論の表示法を用いると、音韻的な重なりを含まない混成語とその構成要素との対応関

<sup>5</sup> 関係形態論において“morphosyntax”とは、〈形態と統語〉ではなく〈形態レベルの統語〉を指す。

<sup>6</sup> *HIStory* については、*S*の有声性が構成要素間で異なる（*bis* /hɪz/ vs. *history* /hɪstə.ɪ/）。その意味で、厳密な音韻的包含関係は成立していないことになる。

係は、(6) のように単純に表すことができる。

- (6) Semantics: a. SPOON<sub>4</sub>    b. FORK<sub>5</sub>    c. [SPOON<sub>4</sub> + FORK<sub>5</sub>]<sub>6</sub>  
 Morphosyntax: N<sub>4</sub>                      N<sub>5</sub>                      N<sub>6</sub>  
 Phonology: /sp<sup>7</sup> un/<sub>4</sub>                      /f ɔ.ɪk<sup>8</sup> /<sub>5</sub>                      /sp<sup>7</sup> ɔ.ɪk<sup>8</sup> /<sub>6</sub>

(Jackendoff and Audring 2020: 112 を調整)

一方、音韻的な重なりを含む混成語のうち非包含型のものに関しては、(7) のような工夫がなされる。混成に用いられる部分の始点と終点を示すことで、/mpoʊz/ の部分が冗長的に供給されていることを明示するという方法である。

- (7) Semantics: a. COMPOSE<sub>9</sub>    b. SYMPOSIUM<sub>10</sub>  
 Morphosyntax: V<sub>9</sub>                      N<sub>10</sub>  
 Phonology: /<sup>9</sup>kəmpoʊz<sup>9</sup> /    /sɪ ɪɪmpoʊziəm<sub>11</sub> /<sub>10</sub>

Semantics: c. [SYMPOSIUM<sub>10</sub> ABOUT COMPOSING<sub>9</sub>]<sub>12</sub>

Morphosyntax: N<sub>12</sub>

Phonology: <sup>12</sup>/<sup>9</sup>kə ɪɪmpoʊz<sup>9</sup> iəm<sub>11</sub> /<sub>12</sub>

(Jackendoff and Audring 2020: 112 を調整)



包含型の混成語は一般に扱われることが少なく、関係形態論にも分析例が見当たらない。しかし、*goose/geese* のような母音変異の扱い (Jackendoff and Audring 2020: 118ff) を見る限り、アスタリスク表示 (star notation) を用いるのが妥当と考えられる。この表示法は、2つの形式が、アスタリスクで挟まれた部分を除いて同じであることを示す (例: /g \*u\* s/<sub>100</sub> ~ /g \*ɪ\* s/<sub>100</sub>)。包含型の混成語は、音韻構造 (例: /bitlɪz/) からは混成語であることがわからない。包含関係を明示するのは、音韻ではなく表記 (例: <beatles>) である。このことを示すためには、(8) のように表記部門 (orthography) を新たに追加する必要がある (Jackendoff and Audring 2020: Ch. 8)。

- (8) Semantics: a. BEAT<sub>13</sub>    b. [PLUR (BEETLE<sub>14</sub>)]<sub>16</sub>  
 Morphosyntax: N<sub>13</sub>                      [N N<sub>14</sub> PL<sub>15</sub>]<sub>16</sub>  
 Phonology: /<sub>13</sub>bit<sub>13</sub> /                      <sub>16</sub>/bit<sub>14</sub> z<sub>15</sub> /<sub>16</sub>  
 Orthography: <<sub>13</sub>beat<sub>13</sub>>                      <sub>16</sub><b \*ee\* tle><sub>14</sub> s<sub>15</sub>><sub>16</sub>

Semantics: c. BEATLES<sub>17</sub>

Morphosyntax: Proper Noun<sub>17</sub>

Phonology: /<sub>13,16</sub>bit<sub>13</sub> lɪz<sub>16</sub> /<sub>17</sub>



Orthography: <sub>16</sub><<sub>13</sub>b \*ea\* t<sub>13</sub> les><sub>16,17</sub>





アスタリスクが示すように, (8b) と (8c) の表記は母音部分のみが異なる。この表示法によりはつきりするのだが, (8c) において, 音韻部門に加えて表記部門でも構成要素間の包含関係 (に類する関係) が成立しているという点である。つまり, 音韻構造の合成方法が, 表記にも反映されていることになる。


以下では, 日本人名における漢字表記の冗長性が, ここで見た混成の特徴と共通点および相違点を持つことを論ずる。

#### 4. 関係形態論による冗長な漢字表記の分析

関係形態論は, 音韻, 統語, 意味の3部門を基本として進められているが, 第3節で見たように, 表記, さらには使用域 (register) や多言語・多方言話者のレキシコンにおける言語・方言などの部門の追加が想定されている (Jackendoff and Audring 2020: Ch. 8)。ここでは, このうち表記部門をさらに探索することで, 主にゲルマン諸語を対象としている関係形態論に新たな視点を提供したい。

##### 4.1 混成との共通点と相違点

第2節で見た3種類の非規範的な日本人名は, いずれも冗長性を持つ混成語と似た方法で捉えることができる。まず, (9) は「水月」型における部門間・項目間の関係である<sup>7</sup>。各漢字が, 表意文字として (9a, b) のように意味を有している点にも注意されたい。

- (9) Semantics: a. WATER<sub>18</sub> b. MOON<sub>19</sub>  
 Morphosyntax: N<sub>18</sub> N<sub>19</sub>  
 Phonology: /<sub>18</sub>mizu<sub>18</sub> / /<sub>19</sub>zuki<sub>19</sub> /  
 Orthography: < 水 ><sub>18</sub> < 月 ><sub>19</sub>
- Semantics: c. MIZUKI<sub>20</sub>  
 Morphosyntax: Proper Noun<sub>20</sub>  
 Phonology: /<sub>18</sub>mi <sub>19</sub>zu<sub>18</sub> ki<sub>19</sub> /<sub>20</sub>  
  
 Orthography: < 水<sub>18</sub> 月<sub>19>20</sub>

次に, 「咲希」型においては, (10) のように2つの漢字の音韻構造に包含関係が認められる。

- (10) Semantics: a. FLOWER<sub>21</sub> b. HOPE<sub>22</sub>  
 Morphosyntax: V 連用形<sub>21</sub> -<sub>22</sub>  
 Phonology: /<sub>21</sub>saki<sub>21</sub> / /<sub>22</sub>ki<sub>22</sub> /

<sup>7</sup>「水月」における「月」の連濁については, スキーマを設定することで別途取り扱うことになる。アクセント・パターンについても同様である (Jackendoff and Audring 2020: Ch. 6)。

Orthography: <咲><sup>21</sup>                      <希><sup>22</sup>

Semantics:            c. SAKI<sup>23</sup>

Morphosyntax:       Proper Noun<sup>23</sup>

Phonology:            /<sup>21</sup>sa <sup>22</sup>ki<sup>21,22</sup> /<sup>23</sup>

┌───┐  
└───┘

Orthography:       <咲<sup>21</sup> 希<sup>22>23</sup>

「花奏」型の対応関係は (11) のようになる。やはり音韻構造において包含関係が成立している。

(11) Semantics:       a. FLOWER<sup>24</sup>    b. PLAY<sup>25</sup>

Morphosyntax:      -<sup>24</sup>                      V 連用形<sup>25</sup>

Phonology:            /<sup>24</sup>ka<sup>24</sup> /                      /<sup>25</sup>kanade<sup>25</sup> /

Orthography:       <花><sup>24</sup>                      <奏><sup>25</sup>

Semantics:            c. KANADE<sup>26</sup>

Morphosyntax:       Proper Noun<sup>26</sup>

Phonology:            /<sup>24,25</sup>ka<sup>24</sup> nade<sup>25</sup> /<sup>26</sup>

┌───┐  
└───┘

Orthography:       <花<sup>24</sup> 奏<sup>25>26</sup>

以上のように、いずれの型においても、多くの混成語と同様に、音韻構造における構成要素間の重なりが存在する。「水月」型は非包含型の混成（例：*composium*）、「咲希」型と「花奏」型は包含型の混成（例：*(The) Beatles*）と同様の音韻的重なりを含んでいる。すなわち、日本語の漢字体系は、混成という既存の語形成パターンを援用することで、新たな命名法を成立させていると見ることができる。

一方で、「咲希」型と「花奏」型については、混成と異なる特徴も指摘できる。(10), (11) の表記部門にアスタリスク表示が用いられていないことからわかるように、「咲希」や「花奏」といった名前においては、構成要素の漢字がともにもとの姿のまま実現している。(8) で <beat> と <b \*ee\* tles> の間に見たような、構成要素間の擬似的な包含関係は見られない。つまり、音韻構造は /saki/ (\*sakiiki/) や /kanade/ (\*kakanade/) のように一本化しているにもかかわらず、表記は構成要素を保持しているわけである。音韻部門と表記部門のこのような不一致が生じる背景には、表音文字かつ表語文字であるという漢字の二面性が働いているものと思われる。

関係形態論を用いた本分析は、冗長な漢字表記に見込まれる効果の扱いにおいても好都合と考えられる。「水樹」ではなく「水月」という漢字を用いる 1 つの理由は、「月」という漢字が持つプラス・イメージの利用であると思われる。「咲希」の「希」や「花奏」の「花」についても同様である。このことは、「水月」、「咲希」、「花奏」が、それぞれ「月」、「希」、「花」の意味 (MOON, HOPE, FLOWER) と関係リンク 19, 22, 24 を有することでうまく表されている。

#### 4.2 冗長性を想定しない分析

最後に、考えられる代替案に触れておきたい。本稿では、積極的に音韻的な冗長性というアイデアを受け入れてきた。ところが、非規範的な日本人名表記の一部については、冗長性を排除した分析も不可能ではないと思われる。

具体的には、第2節でも触れたように、「咲希」型のうち特に1つ目の漢字が和語の動詞や形容詞・形容動詞に対応する場合には、(12)のように冗長性を認めない見方もありうる。

- (12) ☆歩夢 /ajumu/ : 歩 /aju/ + 夢 /mu/ (cf. 歩む /ajum-u/)  
 ☆新太 /arata/ : 新 /ara/ + 太 /ta/ (cf. 新太 /arata/)  
 久志 /hisasi/ : 久 /hisa/ + 志 /si/ (cf. 久しい /hisasi-i/)  
 ☆咲希 /saki/ : 咲 /sa/ + 希 /ki/ (cf. 咲く /sak-u/)  
 ☆紬希 /tsumugi/ : 紬 /tsumu/ + 希 /gi/ (cf. 紬ぐ /tsumug-u/)  
 ☆結衣 /juui/ : 結 /ju/ + 衣 /i/ (cf. 結う /juw-u/)  
 ☆希実 /nozomi/ : 希 /nozo/ + 実 /mi/ (cf. 希む /nozom-u/)  
 ☆光莉 /hikari/ : 光 /hika/ + 莉 /ri/ (cf. 光る /hikar-u/)  
 ☆遥香 /haruka/ : 遥 /haru/ + 香 /ka/ (cf. 遥か /haruka/)  
 ☆明莉 /akari/ : 明 /aka/ + 莉 /ri/ (cf. 明るい /akaru-i/)  
 萌絵 /moe/ : 萌 /mo/ + 絵 /e/ (cf. 萌える /moe-ru/)  
 恵美 /megumi/ : 恵 /megu/ + 美 /mi/ (cf. 恵む /megum-u/)  
 好美 /konomi/ : 好 /kono/ + 美 /mi/ (cf. 好む /konom-u/)  
 仄香 /honoka/ : 仄 /hono/ + 香 /ka/ (cf. 仄か /honoka/)  
 静香 /sizuka/ : 静 /sizu/ + 香 /ka/ (cf. 静か /sizuka/)

このような分析を考える根拠として、これらの漢字が送り仮名を伴う場合、漢字と仮名の境界が形態素境界と一致しないことが挙げられる ((12) の cf. を参照)。形態素境界と一致しない表記の境界が、日本語母語話者の中に「歩む /aju-mu/」や「咲く /sa-ku/」のような異分析を生じさせ、それが (12) のように「送り仮名的」な漢字の付加を引き起こしている可能性がある。

この代替案は、容易に排除できないばかりか、部分的な傍証も見つかる。例えば、「歩子 /ajuko/」、「風咲 /nagisa/」、「萌音 /mone/」のような名前が実在するが、これらはそれぞれ「歩む /aju-mu/」、「咲く /sa-ku/」、「萌える /mo-eru/」という異分析の介在を思わせる<sup>8</sup>。

とはいえ、冗長性を認めることで、3種類の非規範的な漢字使用が統一的に捉えられる点、さらに、その混成的性質が見出せる点は見逃せない。さらに、冗長性を認める分析は、「そもそもなぜ冗長な漢字使用が行われるのか」という根本的な問題も自然に扱うことができる。冗長な漢

<sup>8</sup> ただ、音の削除(略訓)は、「心 /kokoro/」、「音 /oto/」、「南 /minami/」のように名詞に対応する(つまり送り仮名を伴わない)漢字にも見られる(例:「心美 /kokomi/」、「颯音 /hajato/」、「佳南 /kanami/」)(古川 2013, 荻原 2015, Ogihara et al. 2015)。構成要素間に重なりのない混成(例: *spork*)に似た例である。さらに、「足掻く /agaku/」(<足 /asi/)や「泉井 /izui/」(<泉 /izumi/)のような例も古くから存在することから、音の削除自体は異分析を経ずとも可能ということになる。

字表記を持つ名前の中には、(13) のように読みが同じである非冗長な名前が前もって存在しているものがある。そして、その多くは☆が示すように人気の名前である。

(13) a. 「水月」型：

水月 vs. ☆美月 /mizuki/ (美 /mi/ + 月 /zuki/)

b. 「咲希」型：

☆湊斗 vs. ☆湊 /minato/

匠海 vs. ☆匠 /takumi/

☆歩夢 vs. ☆歩 /ajumu/

☆新太 vs. ☆新 /arata/

☆葵衣 vs. ☆葵 /aoi/

☆花奈 vs. ☆花 /hana/

☆咲希 vs. ☆咲 /saki/

☆紬希 vs. ☆紬 /tsumugi/

☆結衣 vs. ☆結 /jui/

☆希実 vs. ☆希 /nozomi/

☆遥香 vs. ☆遥 /haruka/

唯衣 vs. ☆唯 /jui/

萌絵 vs. 萌 /moe/

恵美 vs. 恵 /megumi/

c. 「花奏」型：

花奏 vs. ☆奏 /kanade/

史栞 vs. ☆栞 /siori/

冗長な漢字使用には、人気の名前の音韻を引き継ぎつつ、意味や字面に個性を持たせる試みという側面がある。この背景に合うのはやはり、「歩 /aju/ + 夢 /mu/」ではなく「歩 /ajumu/ + 夢 /mu/」という冗長性を認める分析法であろう<sup>9</sup>。

なお、「咲希」型と「花奏」型については、男性名「大空 /sora/」の「大」と同様に、追加的要素である「希」や「花」が音韻的にゼロである可能性もはらんでいる。一方で、これらの漢字の読みが「咲」や「奏」の読みと重なりを持つという事実はやはり見逃せない。この重なりこそが、これらの漢字が採用される理由であると考えられるからである。

以上のように、この節で扱った名前については、冗長性を認める分析のほうがよいと思われるものの、そうでない分析も捨てきれない。母語話者のレキシコンの状態に忠実な分析を目指すのであれば、むしろ冗長な場合と非冗長な場合の両方を認め、事例ごとに判断していく道もあろう。心理学的実験を取り入れた実証的検証が必要な観点である。

<sup>9</sup> この点は松本曜氏にご指摘いただいた。

## 5. おわりに

本稿では、近年の日本人名に見られる非規範的な漢字使用を、関係形態論の枠組みで分析した。これにより、冗長な漢字表記と混成の共通点と相違点が明らかになるとともに、同枠組みが表記の分析にも適していることが確認された。本稿で扱った例は、日本語における創造的な命名法のほんの一端に過ぎない。今後、どのようなパターンが許容されないかも含め、より包括的な観察が望まれる。

## 参考文献

- Booij, Geert (2010) *Construction morphology*. Oxford: Oxford University Press.
- Booij, Geert (ed.) (2018) *The construction of words: Advances in construction morphology*. Cham: Springer.
- Collazo, Anja Maria (2016) The Japanese naming system: Morphology and semantics of individual names. Unpublished doctoral dissertation, Kyoto University.
- DiGirolamo, Cara M. (2012) The fandom pairing name: Blends and the phonology-orthography interface. *Names: A Journal of Onomastics* 60: 231-243.
- Fradin, Bernhard (2015) Blending. In: Peter O. Müller, Ingeborg Ohnheiser, Susan Olsen and Franz Rainer (eds.) *Word-formation: An international handbook of the languages of Europe*, 386-413. Berlin: De Gruyter Mouton.
- 古川達也 (2013) 「現代の子どもの名前：読みにくさの原因はどこにあるのか」『大阪大谷大学教育研究』39: 94-102.
- Jackendoff, Ray (2002) *Foundations of language: Brain, meaning, grammar, evolution*. Oxford: Oxford University Press.
- Jackendoff, Ray and Jenny Audring (2020) *The texture of the lexicon: Relational morphology and the parallel architecture*. Oxford: Oxford University Press.
- 川岸克己 (2013) 「人名における漢字使用の変化とその誘因」『安田女子大学紀要』41: 1-14.
- 北原真冬 (2017) 「キラキラネームは音韻的にキラキラしているのか？：名前と一般語の頻度分布比較による予備的考察」田中真一・ピンテル＝ガーボル・小川晋史・儀利古幹雄・竹安大 (編) 『音韻研究の新展開：窪菌晴夫教授還暦記念論文集』112-125. 東京：開拓社.
- 窪菌晴夫 (2008) 『ネーミングの言語学：ハリー・ポッターからドラゴンボールまで』東京：開拓社.
- 萩原祐二 (2015) 「近年の日本における個性的な名前の特徴とその類型」『人間環境学研究』13: 177-183.
- Ogihara, Yuji, Hiroyo Fujita, Hitoshi Tominaga, Sho Ishigaki, Takuya Kashimoto, Ayano Takahashi, Kyoko Toyohara and Yukiko Uchida (2015) Are common names becoming less common? The rise in uniqueness and individualism in Japan. *Frontiers in Psychology* 6: 1490. 1-14.
- 張強 (2015) 「近・現代の日本人の名前に関する言語学的研究」博士論文, 広島市立大学.

## 調査資料

- AMUSE 「アーティスト一覧」<https://artist.amuse.co.jp/artist/kids.html> (2020年9月26日確認)
- CRAYON 「専属女の子モデル」<https://www.crayon.ne.jp/girl/list.html> (2020年9月26日確認)
- 明治安田生命「名前ランキング」<https://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/index.html> (2020年8月24日確認)
- NEWS エンターテインメント「タレント一覧」[http://news-enter.com/talent\\_all/](http://news-enter.com/talent_all/) (2020年9月26日確認)
- 『良運命名® - 名前ランキング』<https://www.nihon-ikuji.com/ranking/name/male> (2020年8月24日確認)
- Signboard40「子役一覧, 事務所所属のキッズモデル, ジュニアモデル」<http://www.signboard40.com/search.html> (2020年9月26日確認)
- スマイルモンキー「タレントプロフィール」<https://www.smile-monkey.com/profile/> (2020年9月26日確認)

## Orthographical Redundancy in Japanese Personal Names: A Relational Morphology Account

AKITA Kimi

Nagoya University /

Invited Associate Professor, Theory & Typology Division, Research Department, NINJAL

### Abstract

Numerous Japanese personal names in recent times have started including phoneme sequences that are dually represented by two kanji characters. For example, 水月 /mizuki/ is a female name whose components—水 /mizu/ ‘water’ and 月 /zuki/ ‘moon’—phonologically overlap with each other. 咲希 /saki/ is a female name in which 咲 ‘to flower’ alone can be pronounced /saki/ but is followed by the extra character 希 /ki/ ‘hope’. 花奏 /kanade/ is a female name that illustrates the opposite: 花 /ka/ ‘flower’ + 奏 /kanade/ ‘to play (a musical instrument)’. This paper analyzes these noncanonical names within the framework of Relational Morphology. It demonstrates that 水月-type names are parallel to blends with phonological overlap, such as *composium* (*compose* + *symposium*); 咲希- and 花奏-type names are similar to blends with phonological inclusion, such as (*The*) *Beatles* (*beat* + *beetles*), but retain their components’ orthography, suggesting the creativity of logographic naming.

**Keywords:** blending, kanji, orthography, personal names, Relational Morphology